

明訓一斑抄  
上

口仁  
1.297  
1





門口仁  
第 297  
卷 1

# 明訓一斑抄 全二冊

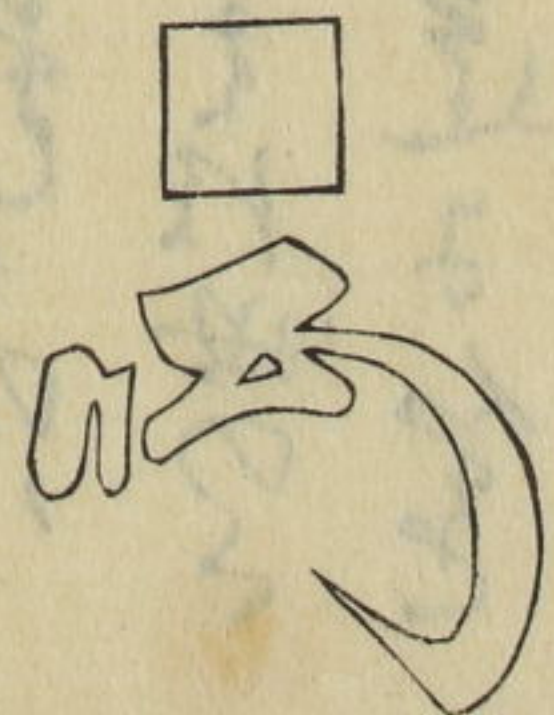
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...  
足引於大和... 此の書は... 祖宗の御事...

高



時よあまたみんしよたかひにわたりて  
あしあふむくまひまうぬるまはし  
童子よらゐりむも本意あはれに  
かゝりて善く結ぶるまはれをいへり  
子孫に傳へ示はるべし

源朝臣言



目錄

- 一 仁心ヲ本トスヘキ事
- 一 奢侈ヲ禁スヘキ事
- 一 諫言ヲ用ユヘキ事
- 一 刑ハ刑ナキ二期スヘキ事
- 一 治ニ乱ヲ忘ルヘカラサル事
- 一 佛法ヲ信スヘカラサル事
- 一 夷狄ヲ近付ヘカラサル事



Blank page with vertical lines for text.

明訓一班抄卷之一

仁心ヲ本トスヘキ事

明治四十年一月二十三日  
中村健  
氏寄贈



東照宮雅樂頭大炊頭伯耆守三人ヲ召寄セラレ汝等三人人竹千代ヲ頼ミ可申ト 秀忠被申タルカイヲ夕不被申渡也 秀忠同前二我ニ頼ムゾトノ上意也ケレハ右三人衆謹テイマ夕何タル仰渡サレモ無御坐候ト申上ラル、時 上意二昨日ノ事ナレハ定テ日柄ヲ撰ヒ申サル、ニテ有ヘキソ 秀忠ノ内意ハ雅樂頭ヲ後見ニ備ヘ可申ト被申ソ仁ヲ以テ夕テヨ大炊ハ智ヲ以テ諫メヨ伯耆ハ勇ヲ以テ守立ヨ汝等三人一口和同シテ諫



言セヨ汝等 竹千代ト我風儀トヒトシク守立ス  
 キト思フベカラス兼テイフ如ク慈悲ヲ萬ノ根元  
 ト申シテ風儀ハスキ不スキカアルゾ此意ヲ譬テ  
 イフニ我ハ寅ノ歳ニテ金性也 秀忠ハ卯ノ歳ニ  
 テ土性也 竹千代ハ辰ノ歳ニテ火性也人ノ生レ  
 付モ大方此心ゾ我性ナル迎 秀忠ヲ金ニセント  
 思フテモナラザルゾ此心ニテ人ノ風儀ハ俄ニ面  
 リ難キモノゾ其生付ニ隨テ善政ヲ行ハセヨ第一  
 ノ肝要ハ武道ノ急ラザル莫ゾサレバ人ノ身命ハ  
 生死ヲハカルニ脉ヲ取テ手首一寸中ニテ知ル  
 コトク武家ニテ武道怠ルハ身命ノ死脉トシレト

被 仰ケル云々  
 同上意ニ兎角常々側ニテ召仕候傳ノ者第一孝行  
 ト天命ト下ヘ慈悲ヲカケ武家ノ莫幼年ヨリ申聞  
 候ヘハ自然ト身持ヨク成ルモノニ候君臣ト申下  
 ハ定リ事ニ候得共君タルモノハ臣君ト心得申莫  
 專一ヲ由云々兎角上ヨリハ何事ニヨラス慈悲ヲ  
 カケ鼎肩偏頗ナク賞罰ヲ正シク臣ヲハ君ノ本ト  
 心得候ヘハヨロシク候臣アリテノ大名ナレハ召  
 使者ナクテハ大名ノ詮ハナク候云々  
 同上意ニ幼少ノ節萬事ヲホヤウニ輕キ者ノ物言  
 ヒマ子ヌヤウ心得候莫夫モアマリ大様過テハ却



テ下ノ情ニ委シカラズ慈悲ノ心薄ク成申候云々  
同上意ニ子トモノ育テヤウハ武士ハ武士ヲ付夕  
ルガ能ゾ上杉憲政ノ子龍若ガ一ヲ定テ聞及夕ラ  
ンヲ如此ノ覺悟以ノ外惡敷ソ子ヲ育ツルニハ忘  
レテモ柔弱ニ馴又血氣ノ小勇ヲ好ザルヤウニス  
ベシ人ノ基ハ慈悲ナリ慈悲アル者ハ當分惡敷有  
テモ心ナラル者ゾ無慈悲ナル者ハ人ニナル一ナ  
シ秀次ナトノ様ニ無慈悲ニシテハ人ニ成力タキ  
ゾ云々

同上意ニ九慈悲ハ草木ノ根ゾ人ノ和ハ花實ノ根  
ヲヨク養ヘハ花モ實モ年々出来ル爰ヲ考テ只根

ヲ強クセヨ根ヲ強クスルハ古法ヲ守リ奢ナク慈  
悲ヲ萬ノ根元ト定ルニアリ

同上意ニ汝等慈悲深ク常々善ヲ思フベシ但爰ニ  
心得アリ何程自分ニ善ナリト思フトモ天下ノ諸  
人惡ナリト云ハ將軍目カ子ハツレタルニテ有ゾ  
云々

同上意ニ人ニ大根アリ先ツ慈悲ヲ萬ノ根元ニ定  
メ若無慈悲ナル豈偽カマシキ豈少レニテ七有ハ  
隨分諫言セヨ云々

同上意ニ我領分ハ勿論其外天下ニ一統セシ以後公  
料トナリシ民百姓トテモ我子孫萬代ト願フ由聞



正有リ是三河以来ノ旧封ニテ年貢取箇ノ方諸家  
 ヨリハ少分ニ取候ヘト申付ル故ナリ時法ヲ子孫  
 マテ第一ニ守レヘキナレトモ太平打續上奢リ  
 下ヘツラヒ國用乏キ風ニ至リ勘定奉行ナトイフ  
 者代官ヲセ夕ケ取箇スクナキ時ハ不平顔色ヲモ  
 テ不勤ナト、イハシク代官共モ當時ノナリ合ヨキ  
 ヤウニ跡ノ更ニハカマハス法外ニ年貢取箇ヲ増  
 シ百姓ヲ困窮サセ上ヲウトマセ候様致スベシ左  
 様ノ不了箇ナル勘定奉行ヲ御為ナト、イヒ立年  
 寄共ハジメ側子カク勤ル者トモ立身ヲ取持加増  
 ヲモ遣ハスヤウニ成タラハ國家ノ衰微ト知ルヘ

シ我百年ノ後ニモ天下兵革起ラン更ハ有ヘカラ  
 ス只百姓ノ心ハナレ上ノ冥加氣運モ薄クナラズ  
 一歎ハシキ更ナリカヤウノ更中主ヨリ以下ハ執  
 政ノ者ノ志次第ナリ水ヨク船ヲ浮ヘ水ヨク船ヲ  
 クツカヘスタ、此更ヲヨク心得ラレヨト、秀  
 忠公へ毎度御教訓ナリ

齊□謹テ案スルニ慈悲ハ佛語ヨリ出タルコトニ  
 ライハシ、惻隱又惠ノ字ナト當ルヘシ惠ハ仁ノ  
 一端ナレドモ平均ニ成シヤウ有ベシタト、ハバ  
 自分聞見スル所ヲノミ惠ムハ惡シ將軍ハ天下  
 ノ人ヲ惠ミ國主領主領民ヲ一體ニ惠ムヤウニ



スヘキナリ一體ニ惠ム時ハ即仁也人ノ悦ブ  
 所ニヨリテ惠ム時ハ鼻ノ先ノ事ノミニテ一體  
 ニアラス惠ミテ却テ害トモナル事也又惠ミテ  
 受ル人モ自分ハ聊カノ惠ミニテモ天下ニ及ヒ  
 ヌルヲ以テ御仁政ト仰キ奉ルヘキ事也ソモク  
 東照宮ニテハ慈悲々トノ玉フハ通俗ニサト  
 シヤスキ為ニ佛語ヲ用ヒ玉フトヘドモソノ  
 御言葉ヲ味フルニ慈悲則仁徳也御言行共ニ仁  
 ヲ本トシ玉フ故天下ノ人民喜服シテ従ヘリ  
 台徳公大猷公皆質素儉約ヲ施シ玉ヒ文武ヲ御  
 勵シ御言行共ニ仁ヲ以テ本ト破遊シ故今ノ御

世迄モ明君トハ奉稱ナリ 將軍家右大將公ハ  
 勿論凡民ノ父母タルモノハ 三代將軍有徳公  
 ノ御言行ヲシタヒ奉リ仁徳ヲ本トシ文武ヲ勵  
 シ質素ヲ守リ明將明君ト仰カル、ヤウアリタ  
 キ事ナリ 三代將軍有徳公ノ如ク仁徳ヲ本ト  
 シ賢能ノ士ヲ擧ケ質素儉約文武ヲ勵シ玉フ時  
 ハ永世迄モ明君ト奉稱寶永御代ノ如ク茲吏奸  
 僧婦女子ノ言語ヲ信シ玉ヘバ永世寶永ノ御政  
 ヲソシリ奉ル恐レザルベケンヤ戒メザルベケ  
 ンヤ道ニツ仁ト不仁トノミニ仁ヲ行ハサレハ必  
 不仁ニ陷ルヘシ本文 上意等熟讀玩味セズン



ハアルベカラズ

奢侈ヲ禁スヘキ也

東照宮上意ニ奢心ナク物莫儉約ヲ用ヒ常ニ其程ヲ能シルヲ政道正シキトイフナレバ下々ハ過公ニ知行其外給ハルモノ其程ニ施シテトフレハ奢ル者ニ引當テ吝嗇ノ取沙汰致シ候古ヨリ賢君賢臣ノ過令ニ給リ物萬事花麗ノ行ハナク身ヲ慎シミ儉約ヲ用ヒシ莫ニ候

同上意二人ニモ身ニモ去ルヘキ物ハ奢リソ云々同上意ニ武道不案内ナル家ハ諸士ノ風俗柔弱非義ニナリテ武勇ナケレハ一戦ニ打負ル時ハ罪ナ

キ嬰兒也一モ一時ニ亡ヒヌルハ古今タノシ多シ武家ニ生レテ武道ニ愚ナルハ鼠トラヌ猫ノコトシ公家ト武家トノ替リハ譬ハ金ナラハ公家ハ金銀ノコトク武家ハ鐵ニ同シ然ルニ人民金銀ヲ好テ鐵ノ大寶ナルヲラシラス鐵ハ宝器ノ本也五穀ヲ作り竹木ヲ切ニモ朝夕ノ食ヲ調ヘ尤天下國家ノ乱ヲ拂ヒ大平ヲ致スヲ鐵ノ用多シ誠ニ大寶ノ長タルモノ也爰ヲ不見付只金銀ノミ好ミヌレハ災ノ媒トナルゾ武家武ニ怠リ公家風ニナレハ刀服差代替ヘ金銀ヲ巾差等ニ入レ丸腰ニテ往來シテ命ヲ失フニ同シ只各家職ヲヨク勤ムル者ヲ舉テ



奢ヲ絶チ慈悲ヲ萬ノ本トシテ天下ヲ治メ玉ヘト  
 申ヘシ  
 同上意ニ関白秀次木村力大坂城ヨリ水指ノ蓋ヲ  
 取参リ候ヨシニ付テ是ヲ賞玩シテ秀吉ノ大恩ヲ  
 忘レ忽セヒラレタリ必武道不察内成者ハ其分別  
 ニシテ先ヲ知ラス物モ俄ニ行當リ臆病也臆病成  
 者ハカサツニテ奢リ強シ奢リ強キモノハ依怙鼻  
 屑アリ如斯者ハ一門家臣ヲ始メ大身成者程頼ニ  
 ナラス云々  
 同上意ニ忠臣ハ大小上下近習外様古参新参ニヨ  
 ラザル物ゾ只人ノ心ニ有ルゾ然ル時汝等ハ諸人

ニ心安クアテカヒ其者ノ埋レザル様ニシテ忠臣  
 ヲ及サセヨ汝等高上ニシテ諸人地ニホリ入様ニ  
 成ル時ハ譬ヘハ上位ハ天ニノボリ下位ハ地ニ入  
 ルニヒトシ此時君臣ノ間遠ザカリ縁キレテ家滅  
 亡スルゾ總シテ主人家老ノ前ニ行少々ハ無礼ニ  
 見ユル程成者ハ多分陰程上ヲ大直ニ思フモノゾ  
 家老出頭ナリトテ跡先ノ考ヘナシニ諸人ニ慮外  
 ヲスル時ハ諸人非ナキ主ヲ恨ムル物ゾ此考ヘナ  
 クハイマフスルヲ満足シ主ヲカサニ著テ奢ル者  
 ハウツケノ頂上也若是ニ小邪ヲフクムモノアラ  
 ハカノ彌四郎泰ノ趙高カ類也又人ニ慮外ヲ仕懸



ラレテ何トモ思ハヌ者ハ何ノ役ニモ立ヌ物ゾヨ  
 クク心得ヘシ同シ侍力時運ニヨリテコソ主トナ  
 リ家老出頭トナリ諸侍トナルニ當分已レ時ニ逢  
 ヒタリトテモ諸人ニ愚外ヲシ侈リ強キ者ハウツ  
 ケ者成ニヨリテ天下ノ衰ハイフニ及バス國主郡  
 主家中トモ奢者ハ災ニ成故嫌フナリ此故ニ下野  
 カ家頼小笠原監物ヲ松嶋へ流セシツ監物ハ一廉  
 下野力用ニモ立ヘキ者ナレ共侈リ有シ故以來簾  
 本諸大名家中迄モ奢有ル者ハ如此スルゾト近ク  
 ハ見ル者遠クハ聞セ奢ヲタツヘキタメ如此ゾ秀  
 吉モ木村常陸ヲ早く成敗シ給ハ、秀次ノ惡ト是

程マテニハ有マジキゾ總シテ萬事ヲ細ニ聞テ心  
 底ニ納メ能々吟味シテ其成敗ヲ成ベシ物ゴト短  
 慮ニスルヲナカレ天下國々嶋々迄兼テ能聞テ其  
 善惡ヲ正スヘシ重々云ヒ聞スル如ク跡先ノ考ヘ  
 ナク奢強キ者アラハ是ヲ取ヒシグヘシ是天下ヲ  
 治メル第一ノ法ナリ

同上意ニ武道不案内ノ者ハ諸侍ノ嗜ト奢トヲ取  
 チカヘル物ゾ嗜ト云ハ近藤ナトカ如ク似合サル  
 事イタシ朝夕ノイトナミカスカニ身ノ苦シミ大  
 形ナラスシテ身体ヨリ過分ニ人馬ヲ持尤武具馬  
 具キラベヤカニシ常ニ家職ヲ忘レヌ是非ヲ能正



シ誰カ前ニテモ理ハ理非ハ非ト云者ナリ是等ヲ  
奢トイフハ不案内也是ヲ侍ノ本意嗜トイフゾ奢  
トイフハ家職ヲ失ヒ武家ハ公家ヲ學ヒ出家町人  
武家ヲ學ヒ我家職ヲ非ニ見ル者ヲ侈者ト云フゾ  
天子ノ御務ニハ正月朔日朝拜ヨリ月次ノ御  
祭事アリ是 天子ノ御家職ナリ関白ハ天下ヲ  
預リ政道正敷人民憂ナク治ルヲ職トス是父道ナ  
リ將軍ハ天下ノ惡逆ヲ討テ有道ヲタスクルヲ職  
トス是武道也是上代ノ法ゾ然ルニ中比ヨリ君臣  
奢強クシテ政ヲ取失ヒ人民安カラズ云々  
同上意ニ天下ノ大寶トイフハ 日本ニ能大將有

時ハ縦ヒ異國ヨリ日本ヲ攻ルトモ武勇ヲフル  
ヒタヤスク退治スルハ天下ノ大寶也既ニ日本  
ヨリ異國ヲ責ツレハ又異國ヨリ日本ヲ責マシ  
キト思フハ愚ナリ又家ノ大宝ハ諸侍武道ヲ忘レ  
ス節儀正敷忠信深クシテ追從輕薄ノ風俗ナキハ  
國家ノ榮ヘ行ヘキ前表ニテ家ノ大寶也又汝カ心  
得ニハ埋レ居タル身ヲ箇様取立シ上ハ其報恩ニ  
只自分カ侈リヲ絶ヘキト思ヒ返スく邪ナキヤウ  
ニ慎ノ一言ヲモ能ク考ヘテイヘ汝カ一言ノ善惡  
ハ將軍ノ善惡ゾ我見捨ザル者ニ奢者アリ我色々  
異見下知スレドモ聞カス此上ハ多分無力自分減



スヘキトヲモフソ不便ナルナリ汝必侈ル心少  
レニテモ有ハ大不忠ト心得身引下リ諸人ニ親敷  
シテ忠信ヲ尽セ云々又大賀如キ奢シ者ヲハ早  
々亡スヘシ云々

東照宮參河ニヲヒテ毎歲夏中御麥飯ナリ御近侍  
ノ人潜ニ白米ノ御飯ヲ御椀ノ底ニ入上ニ飯麥少  
計ヲオホフテ出シケレハ御覽アリテ汝等我心ヲ  
サトラス我ヲ以テヲシムトヲモヘルカ今戰國ノ  
時ニテ兵杖動カ又年ナシ士卒煩擾ニシテ寢食ヲ  
安セス我獨ナシゾ飽足ニシノヒンヤ且我一身ノ  
奉養ヲ儉約ニシテ軍用ニ給セントス百姓ヲ勞テ

自ラユクカナル衰ヲセズト被仰ケレハ聞者皆  
悦服セリ

薩摩守忠吉十五歲初陳ノ時純子ノ如ク浮紋アリ  
唐織へ背ニ一尺四方形金絲ニテ圓ヲ縫ヒ内ニ同  
絲ニテ孔雀ヲ縫ヒ夕リ東照宮其奢ヲ戒メ玉ヲ  
ニヨリ家老小笠原和泉守自分ノ陳羽織高宮布ニ  
テ作りシヲ忠吉へ著セ參ラセ孔雀ノ陣羽織ハ和  
泉守ニ給リ今小笠原三郎左衛門綱千九家ニアリ  
云々

東照宮駿府ニ御在城之節夕御膳ノ御給仕ニ御小  
姐罷出候所其者著候袴ヲ御覽被遊ソレハ何ト申



物ヲト御尋被遊候得ハ彼者茶宇ト申物ノ由申上  
候得ハヲノレノニクキヤツカ天下久敷乱ニ及  
ヒ漸ク此比少靜ニ成萬民モ安キ様ニ見ヘシ處  
等モ不知程ノ夜類ヲ著シタル天下ノ奢ヲ始乱  
ノハシヲ免ス不届者也御前ヲ退キ候ヘト以ノ外  
御機嫌損シ夕御膳ヲ不被召上候故御近臣共種々  
ニ御機嫌ヲ取漸夜ニ入御膳ヲスノ申タルトゾ  
御遣戒ニ大小名ハ申ニ不及平日奢停止分限相應  
ハ勿論直參陪臣ニ至高知ノ面々迄モ知行ノ内一  
分ハ軍役一分ハ領分救米ニ除キ置常々儉約ヲ不  
忘處帶續ヘキ丁國郡在々常々分限ヲ見定可置凶

年飢饉ノ節救民ノ施行見遣スヘカラサル丁直參  
夕リト云トモ百石以下ノ士着用縮衣不可用公私  
兩様木綿ニテ可相濟事

東照宮御鷹野ニ被為成候對御泊リ掛ト申ハ格別  
ニテ御日歸リノ御鷹野ノ節御命當ノ被 仰出ハ  
稀々ノ莫ニテ大方ハ御燒食ヲ御持ヒ被遊野ニテ  
モ由ニテモ二度三度モ被召上其終ニテ御歸被遊  
或時鶴鷹ニ被為成候處々ニテ昼ヨリ前殊ノ外ナ  
ル御物敷故御悅被遊御鷹犬共ヲ曳可參旨被 仰  
付御自身燒食ヲ御出シ被遊不殘犬共ニ御夕ワセ  
被遊其後モ御鷹御遣ヒ被遊何ゾ可被召上トノ



仰二候得共御舟當ノ焼飯ハ大共二御クワセ被遊  
残り不申候ニ付御小姓衆其段被申上候得ハ百姓  
共ノ家ニ芋ノナキトハ有マシキトノ 仰二候得  
共時公柄ニテ里芋無御坐ト被申上候得ハ山ノ芋  
ニテモクレヨト被 仰候ニ付ツク芋ヲ堀出シ水  
煮シテ差上候へハ是ニトノ 御意ニテ塩ヲ御舟  
ク被遊召上ラレ候テ御飯リ被遊候也  
東照宮大坂夏ノ御陣ニ御臺處用意被 仰付候ニ  
膳米五斗于鯛一枚味噌鯉節少ニテ事足へシ味噌  
モ多ク持スナト 上意有之由ケ様ニナケレハ武  
備ハ曾テ以テハカリ難キトナルベシ

東照宮御代ノ儀ハ不及申 台徳公御代ノ比ハ世  
共ニ萬事手輕ノ儀共ニ有之 秀忠様御代松平新  
太郎殿江戸へ下リ初テ御目見被申上候節御勝手  
ニテ御料理ヲ被下候時一坐ノ衆十三人アリ上坐  
ハ織田常真其次ノ坐大炊頭差圖ニテ新太郎着坐  
被致候ト也其節ノ御料理 蒸汁ヲロシ大根ノナマ  
スアラメノ煮物干魚ノ焼物ニテ在之候ト也云々  
東照宮駿河ニテ御不例ノ節板倉内膳正へ御後ノ  
儀被 仰置シハ我等廟處ヲ將軍ヨリ被申付候ニ  
於テハ始祖ノ廟ナレハトノ儀ヲ以作事等結構ニ  
可申付候へ共夫ハ庶用ノ吏ニ候我等子孫ニ至リ



代々共ニ始祖ノ廟ニ増シ又様ニ卜勘弁アル為ニ  
モ有之間其心得ヲ以輕キ宮殿ニ被致置様ニ卜ノ  
御意ニ付 御他界ノ後江戸ニテ内膳正其段將軍  
様へ被申上候處ニ御忝ノ 仰ニ候へ共餘リ輕キ  
宮殿卜アルハ如何ナレハ大体結構ナル御宮居卜  
相見候如ク御普請懸リノ者へ申談候様ニ卜被  
仰出最前ノ御宮出来候也其後寛永三年御父子様  
共御上洛ノ御留守ニ御臺様御煩被為付候段京都  
へ相聞候ニ付駿河大納言様御看病ノ為御暇ニテ  
御下向ノ所ニ九月十五日薨御被遊候ニ付増上寺  
ニ於テ御法夏等之儀七駿河殿御指圖被成候由御

父子様共ニ還御被遊御廟所御靈屋等御造營ノ儀  
共ニ駿河殿ノ御請掛卜罷成候ニ付思召ノマ、ノ  
結構ニ御普請出来候卜也同九年五月二十四日  
台徳院殿御他界ノ節御靈屋御造建ノ儀 崇源院  
様御靈屋ヨリ見増候様仕立可申昔 上意ニ付只  
今ノ如クナル御佛殿出来候卜也此佛殿卜見合候  
得八日光山ニ御立被遊候 東照宮ノ御社ハ殊ノ  
外手淺ニ相見候ニ付惣奉行ノ儀ハ秋元但馬守へ  
被 仰付候刻御宮御修覆ニ付テハ御入用御厭也  
無之間隨分下手ヲコメ 台徳院様御靈屋ニ見増  
候様ニ卜被 仰付出置候ニ付右修覆ノ御入用七



拾萬兩餘ノ由右ノ次第ニ有之候ヘハ御代々御魂  
舎ノ莊殿ハ其始駿河大納言殿ノ物數奇ヨリ起リ  
タルヨシナリ

元和二年三月十七日京都ヨリ臨時ノ為 勅使  
廣橋大納言兼勝卿三條大納言實條卿参向ノ子細  
ハ前將軍大政大臣ノ檢官可被任トノ 宜旨ヲ  
相述 大御處御對席有之候御辭退ノ御心入ト相  
見ヘ拜伏ノ御式臺嚴重ニシテ御請被聞最當日ハ  
別テ御機嫌相勝レ不給故カト各察シケル参府ノ  
大小名各惣出仕アリ極官奉賀ノ御詮義如何ト本  
多上野外相伺トイヘ共候伯ヘノ御對顔モナシ

勅使退席後御寢處ヘ被為入御沙汰不被 仰出只  
御饗應疎畧ナラザル様ニト 下知アル計故上野  
夕罷出誠ニ御當家ノ御名譽是ニスキスト奉祝ケ  
ル 公御息ヲ継セ玉ヒ無勿躰此度蒙 勅使シ  
力冥加ノ程モ恐憚アリ抑武家大政大臣ノ奉賀ハ  
北山鹿園院義満計大臣トシテ拜任有之事ハ平清  
盛前證ヲ出シテノ莫ト聞及フ是義満ノ疎畧也清  
盛相國タルハ 後白河院ノ落胤ニ紛レナキ故  
ナリ官ニ文武ノ差是有文官ハ相國ヲ限トシ武官  
ハ近衛左右ノ大將ヲ先途トセリ太閤秀吉愚昧ニ  
シテ我伶ニ募リ押テ閑白ノ職ニ輔セラレシ莫前



代未聞也武家二三公九卿ノ特任アルヲ 皇統

ノ御威光是ヨリ衰微スルニ非スヤ 家康江府ノ

將任サハ憚アレトモ 敷慮黙止カタク其上令

更大相國ノ 宣旨病中トイヒ御請スヘキ様ナ

シ草創ノ前年ヨリ奢ヲ自制シ貨素ヲ旨トスル也

勿体ナシクトノ 上意ヲ伺ヒテ上野々方ヨリ

思召ヲ密ニ申傳ヘシカハ諸大名奉感テ拜賀ノ献

上等モ相止ミ思ヒクニ退出シケリ希代ノ御謙退

是皆御子孫御長久且又侯伯ノ輩ニ憐奢ヲ御戒ナ

サルヘキ 思召トハ相知レリ

有徳公御代御儉約ニ付諸大夫ノ御役人平生ハ白

小袖着用ニ及ハス縞小袖ニ上下着用ノ儀御用捨

被<sub>レ</sub>仰出是ニ依テ白小袖ヲ着用スベキ格ノ人モ

色替リ襟袖口扱ヲ着シ上着縞小袖ニテ上下紋付

ニ不及戾子裏付肩衣次上下ニシテ平日着セシカ

ハ不勝手ノ人々ハ大ニ助ケニナリシト也其後三

ヶ年ノ間嚴敷儉約被<sub>レ</sub>仰出候故諸士儉約ヲ用ヒ

木綿ノ羽織ハ着セシ云々

常憲公佛法ヲ信シ玉ヒ護持文昭公学者新井篁後

御兩代花義ヲ好玉ヲ處 有徳公御代其害ヲシロ

シメサレナゲカセ玉ヒ只今ニモ非常ノ変アラバ

何ヲ以テカ萬民ヲ救ハセ玉フヘキト色々御工夫



被遊萬事奢侈ヲ止サセ玉フ御儉約ヲ專一ト遊バ  
 サレシ故御先代ノ風儀ト急ニ違シ故萬民行儀正  
 敷御風儀ヲ窮屈ト思フヨリシテ御儉約ノ御政支  
 ヲアシサマニ取沙汰シ公ヲソシル人多カリキ  
 其事ヲ聞シ召テ上意ニ我世ノ中ノ吏ヲ思ヘバ  
 コソ千辛萬苦スル處ニカヘツテ民ノソシリヲ得  
 ルコソ苦シケレトテ御詠被遊世ノ身ハ賤シイヤ  
シカタクシトキ有德公兼テ未未人事ヲ仰出サシケルハ凡  
 天子ハ七廟諸侯ハ五廟大夫ハ三廟ト礼記ニ是ノ  
 ソ已ニ上野芝ノ廟所東照宮台德公大猷公嚴

有公常憲公文昭公有章公七公有元 天子ノコ  
 トシ是武家ノ法ニ過テ聖人ノ心ニ不叶サレハト  
 テ有来レルヲコボチ仕舞ンヤウモナシ只々當時  
 日本ノ礼花美ニ成テ礼ノ誠ニ不叶時ナリ今ニモ  
 死スルナラハ東叡山ノ常憲公御相殿ニ仕ヘ  
 シト享保御代始ニ上意遊サレシ也  
 齊曰謹案ニ和漢古今共明將賢君ト聞ユル人々  
 ハ儉約ヲ不用ハナシ如何トナレハ其國ニ生レ  
 テハ其國ヲ守リ外夷ニ不被奪様ニスル君ヘ  
 忠祖宗ヘノ孝也然レハ質素儉約シテサ入武備  
 ヲ手厚クセンハカタシマシテ質素ノ政ヲ不



行シテ武備ヲ守厚クセン<sub>一</sub>ハ成難キ故也サリ  
ナカラ君暴弱ナル時ハ姦吏奸僧女子町人杯本  
ヨリ武備ヲセンヨリハ今日花菱ヲシテ身ヲ樂  
シミ我禄ハ何故ニ給ルトイフ<sub>一</sub>ヲサヘ忘ル者  
多キナリ婦人僧侶ハ勿論戦争ノ衰ニ不拘ハ終  
身榮花ニサヘ慕ス時ハスムト思ヒ扱又萬一事  
右時ハ僧侶ハ戦争ノ事ハ我持前ニアラス我等  
ハ怨敵退散ノ御祈祷ノ職ナリトテ無益ノ祈祷  
ニ物ヲ費シ荒キニハ近寄ス勝利アル時ハ祈祷  
ノシルシアルヤウニ云ヒナシ又勝利ナキ時ハ  
武士ノ怠リニ云ナシ終テ自分ノカル、事ノミ

ナリカ、ル<sub>一</sub>玉ノ、イフ事ヲ信スル時ハ國家危  
カルベシ本ヨリ僧侶ハ天下ノ大體ヲ不知我朝  
ニ生レ出テ異端ヲ行ヒ人ニモス、ノ自分當坐  
ノ勝手ノミ思ヒテ人ヲ欺ク故闇君俗吏ハ是ヲ  
信シテ儉約セザルガ下々ノ爲ノヤウイツモク  
思ヒアヤマリテ格別ニフマヘナキ者ハ闇ニ引  
入ラル、者也可恐衰也物事スベテ取締ン<sub>一</sub>心  
ナキ人々ニハ惡シクイハレ自分ニテモ骨ノ折  
ルモノ故明君ナラテハ貨素儉約シテ文武ノ世  
話スル<sub>一</sub>ハ不能ナリサル故ニ永世ニテモ其名  
聞ユル<sub>一</sub>也取締ノ衰有志ノ者ハ勿論ヨキトイ



フヘク百姓卑人ニテモ永世ヲ見通シタル大キ  
 ナル町人ハヤハリ悦ブベシ只心ナキ士婦人僧  
 侶小町人ニテセマシキ高スル者共ガキラフ  
 ナリ是等ノ為ニ取締ヲ止メテ當坐譽レヲ求メ  
 永世主君ノヲ名テカス事ナカレ常々儉約ヲ守  
 リテダニ飢饉ノ手當又ハ非常ノ手當ハ難キ莫  
 ナルニマシテヤ常々美麗柔弱ニシテ非常ノ莫  
 アラハ如何ニナスベキニヤ 三代將軍有徳公  
 ノ御賢明ニテサヘ常々質素儉約武備ヲ御勵シ  
 被遊タルヲ況ヤ今我々ノ愚將タラン者儉約ヲ  
 セス武備ヲ捨テ非常ノ節ニ臨ミ御用ヲ欠間敷

策ハ有ベカラズ憚多クモ 三代將軍有徳公ハ  
 申ニ不及其他三親藩ニテモ尾州ノ源敬紀州ノ  
 源南祖宗ノ威義ヲ初諸大名何レモ名將ト聞エ  
 タル者ハ皆常々儉約シテ武備ヲ勵シ家中ニ虚  
 ク禄ヲ食ム者ナキヤウニセシ也遊女出家遊民  
 ノ外君ヨリ禄ヲ給ル家中禄ヲ空クセルコト有ベ  
 カラズ非常ノ莫アラシニハ其家中ハ國主領  
 主ニ付從ヒ國主領主ハ我先ニト 幕府ノ御用  
 ニ立ヤウ常々心掛 幕府ニテハ常々御旗本ニ  
 武備ヲ勵シ玉フテ國主領主ヲ頼ミニ不思召ヤ  
 ウ雙方持合時ハ蠻船何程渡来ル共又ハ萬々一



國持大名二異變有之トモ更ニ恐ル、二不足更  
也右様武備ノ手當調タル上ハ入々相應ノ義ハ  
クルシクモ有之間敷ナレ正儉約ヲ守リ一生取  
カ、リテサへ行届兼候半タトヘハ十分手當出  
来シ上ハ十一分二モ十二分二モ手厚キヤウ心  
掛ベキ事故イツトテモ奢リテヨキトイフ時ハ  
有之間敷且日本中ノ事ト違ヒ異國ヨリ波来  
ノ戦争ハイツ何時有之モ難計出火ト戦争ハ前  
日ヨリ分リタルト計ハ有マシケレハ公邊又  
初奉リ三親藩ハ勿論諸大名共ニ生ル、ヨリ死  
ル迄我皇國ノ道ヲ本トシテ佛法ノ異端邪道

ヲ退ケ常々異國舩来リタルトモ手筈不違様中  
合セ置兼テ覺悟第一タルベシ異端ノ道ヲ惡キ  
トハシリナカラ苟安姑息シテ近ツクル事ナカ  
ンスベテ苟安姑息トイフ事ハ見通シナキト不  
決斷ニヨリ出ル莫ニテ黑白ノ見抜ナキ時ハタ  
トヘハ賢明有志ノ正論ヲ聞一タヒハ尤ト思ヒ  
又愚闇不當ノ邪論ヲ聞テモナル程ト惑ヒ両方  
ノ説ヲ取用ヒテ黒クモナラズ白クモナラスト  
イフ如ク中ヲ取テ中庸ト思ヒ誤ルモノ少ナカ  
ラスコレヲイロニ譬フレハ鼠色ノ所ヲ用ユル  
ニヒトシ鼠色白クハ一切ナルトナシ黒クハ成



カチニテ姑息ヲ用ユル人悪キ方ニ成行ハ此理  
ナリクレクモ非常ノ卓見ヲモテ永世迄モ無用  
ノ奢ヲ禁シ又道武備ヲ勵ミヌルコト人君ノ急  
務ナルヘシ

諫言ヲ用ユヘキ事

東照宮仰ニ某三州在城ノ時若

勅使上使其外

ハレカマシキ事コレアル時ノ用意二三尺ニ餘ル  
鯉ニツ泉水ニ入置或時はヲ見ルニ中ニモ大ナル  
鯉一ツ見ヘサル故其處ニ懸リタル掃除坊主ニカ  
ゴヒ惡敷狐ニトラレタルカト問ヘハ此者申様其  
鯉ハ鈴木久三郎特領シタリトテ御臺所ヘ持参料

理仕夕べ候テ人々ニモ振舞信長公ヨリ參タル御  
酒ノ試仕候ヘト御意ノ由ニテ御樽ノ封ヲ切り  
給候ト申ニ付臺所ノ者ニ尋レハ彼坊主カ申如ク  
ナリニ色共ニ我サヘタシナミ置ニ我伶ナルヤツ  
カナカヤウノ者ヲ其分ニテ置テハ向後諸士ノ風  
儀惡敷ナルヘシ呼付成敗スベキト思ヒ呼付テ長  
刀ノサヤヲハツシ廣椽ニ出テ待處ニ久三郎傍輩  
共同道シケレ共事共セズ某カ前へ出候間二十間  
程置惡キヤツメト言葉ヲカケ長刀ニカケントセ  
シニ久三郎是ヲ見テ己カカ股差ヲ五六間程跡へ  
ナケステ我ニ向ヒ大ノ眼ヲキツト見ヒラキ扱々



愚ナル御大將カナ奥鳥二人間ヲナラシメ作法何  
 國ニ御坐候ヤ夫ニテハ中々天下ノ望ハ成申間敷  
 トテ却テ某ニ惡口セシ時實允ト思ヒ當リ扱タル  
 長カヲ捨テ奥へ入り能々彼カ心中ヲ思ヒハカル  
 二近比支リノ者一人留場ニテ鳥ヲ取一人ハ城ノ  
 堀ニテ網ヲウツ此兩人ヲ追込ヲキシガ是ヲイフ  
 へキ為ワザト鯉ヲ料理シタルナレハ少シモ慮外  
 ニテナシ偏ニ我意ヲ歎キテノ責也ト思ヒ案シ彼  
 ノ走リノ者兩人共奉公ニ出候へト申付テ則久三  
 郎ヲ呼出シ汝力志満足也トイへハ久三良涙ヲ流  
 シ扱々難有 御意ニテ御坐候奉平ノ世ニテ候共

ヒソカニ可申上儀ニ候へ共今乱國ニテ御坐候  
 故如此申上候乱世ニテ私如キノ未々ノ侍モ少シ  
 成共勇氣御坐候カ御爲ト奉存候一ト通りニ候努  
 々私ノ威ヲフルヒ氣隨ニテハ庶御坐ト申候へキ  
 一入彼者力忠心ヲ感シ秘藏ニ思ヒシ也昔モ今モ  
 諸士ノ者心ハ只大將ノ心ニアリカヤウ成責ヲ武  
 道不案内者カ半聞テハ此者武功ニホコルヤウニ  
 申ナラハスモノゾ心ヲ静メテ謁候へ忠心ノ者ナ  
 ラテハ思ヒ切タルトハイハヌモノ也  
 同上意ニ主人ノ惡責ヲ見テ諫言ヲイル、家老ハ  
 戦場ニテ一番鎗ヲ突ヨリモ遙ニ増タル心バセナ



ルベシ子細ハ敵ニ向テ武篇ヲスルニ身命ヲ惜ミ  
 テハナラヌ也然レ共勝負ハ時ノ運ニヨルナ  
 レハ人ヲモ討人ニモ討ル、モノ也縦討死シラモ  
 未代迄譽名ハ子孫ニ残り主人ニモ惜ル、ハ死テ  
 モ本望也若仕合能ク敵ヲ討時ハ勿論子孫迄繁昌  
 ノ基也去程ニ戰場ノ持死テモ生テモ損ノナキ  
 也扱又主人ノ惡逆不道成テ悔テ強ク諫言ヲ致ス  
 トイフハ十カ九ツマテアブナキ勝負也子細ハ其  
 主人無分別ニシテ惡衰ヲ好ノ心カラハ善衰ヲキ  
 ラフ爰ヲ以テ古人モイフ如ク良藥口ニ苦シ金言  
 耳ニ逆フ習ヒ其家老ヲ隔心シテ傍へ近付ヌヤウ

ニ致ス然ル時ハ諂ヒ追従ヲ本トスル者イテキ出  
 頭ノウツケ者共申合テ件ノ家老ヲ惡サマニ取成  
 シ事ニ觸テ諛言ヲ構フ夫ヲ信ト思付テ隔心ノ上  
 見分目ミセ惡クナル其時ハイカナル者モ不足ヲ  
 サシハサミ主ヲ見限り疎ム心出未身構ヲシテ異  
 見ヲヤメ或ハ作病ヲ致シテ引込隠居ヲ願ヒナト  
 シテ物ニカマワヌ又分別ヲ致スハ十人カ八九人迄  
 其通也然ルニ主人ノ惡事申留メスハ其妻我一人  
 ニ歸スル處也ト分別ヲ究ノ身ノ上ヲ忘レ幾度モ  
 争ヒ諫ル家老ハ終ニ手打ニ逢カ抑籠ラレ、カニ  
 テ身上ヲ果シ妻子迄モ迷惑ヲサスルハ必定ノ衰



也爰ヲ以テ考ヘ見レハ戰場ノ一番鏡ハ却テ致シ  
場キ道理也ト 上意也 是ニ付濱松ノ御城ニ御坐  
ノ時或夜本多佐渡守其外外様ノ衆三人御用ノ儀  
ニテ御前へ召出サレケルニ其時一人御前ニテ鼻  
紙袋ヲ明テ一通ノ書付ヲ取出シ封ヲ切テ御前ニ  
差上ル御覽被成夫ハ何ソト 仰ケンバ某内々存  
寄候儀共書付置申候ト憚御心入ニモ可罷成カト  
上覽ニ入奉ルト申上ル扱夫ハ奇特ナル心入ト大  
ニ御感ナサレ佐渡守ハ苦シカラス夫ニテ讀テ聞  
セヨト 仰ラル、ニ付畏候トテ數ヶ條讀終ル  
ノ事ト御挨拶被遊是ニ限ラス此以後迎モ存寄

ノ儀モアラハ無遠慮申聞セヨト 上意アレハ御  
聞届被遊近頃忝ト申テ御前ヲ退出ス佐渡守ハ御  
用ニテ残り居ラレケルニ 仰ラレケルハ唯今ノ  
者讀聞セタル儀ハ如何思フゾト御尋ニ付佐渡守  
御請ニ一ヶ條モ御前ノ御用ニ立可申ト存候夏ハ  
無之様ニ奉存候ト申上ケレハ御手ヲ振ラセラレ  
イヤトヨ是ハアノ者分別一ハイヲ書付タル物ナ  
レハ如在モナク尤我等心入ニ成リハナケレ共思  
寄テ内々書付ヲ調へ懐中シテ時節ヲ見合セ我等  
ニ見セント思フ志ハ何ニモ夕トへ難シ其事カ用  
ニ立テハ用ヒ用ニ立子ハ用ヒヌマテニテコソア



レ惣シテ我ト我身ノ惡ハ知レヌ物也然レハ小身  
 成者心易キ友達傍輩學友ナトアル物ナレハ互ニ  
 身ノ上ノ惡ヲ云テ吟味ヲ遂ル故改メ嗜ム事多キ  
 モノ也左様ノ友ナキ者ハ兼テ人物ヲ聞立テ頼置  
 ヲ缺者ト云也是ハ小身ノ德也扱又大身ナル者總  
 テノ上ニ立程ノ者ハ友達明友ト出會テ心易ク語  
 ルベキヤウモナク身ノ上ノ惡ヲ吟味スルトモナ  
 シ遠慮シテ人モ云ハス日夜朝暮物イフ伽ニハ我  
 同前ノ者ハカリナレハ何事ニテモ御尤トナラデ  
 ハ云ハズ去ルニ依テ少々ノ違ヒハ誤リトモ思ハ  
 ス誤リト思ハ子ハ改メント云心モ付スレテ過ル

ト有モノ也是ハ必竟大身ノ損トモ云ベシ凡人  
 上ニ立テ下ノ諫ヲ聞サル者國ヲ失ヒ家ヲ破ラサ  
 ルハ古今トモニ無此ト 仰ラレ、佐渡守兼リ覺  
 居テ或時子息上野介ニ語り聞セテ落涙ニ及フ上  
 野介其書付ハ如何様ノ文言ニテ御坐候其人ハ誰  
 ニテ候ヤト聞ケハ佐渡守聞テ其文言モ其人モ其  
 方聞テ何ノ用ニモ立莫ニテナシト申ケルト也  
 東照宮濱松ヨリ放鷹トシテ三河へ御出アリシニ  
 今川義元ノ製シヲカレタル大感アリ田間ニ打ス  
 テハ有レヲ御覽シテ幸ノ莫ナリ濱松へ持參ルベ  
 シ盜賊ヲ煮ルニ用ユベシト 仰アリシ程ニ民ト



モ是ヲ持行ント其コシラヘヲナス處へ作左衛門  
廻郷シテ奉ラレ何處へ持行ゾト尋シ程ニ右ノ由  
ヲ申ケレハ則人夫ヲ出シテ其釜ヲ悉ク碎テ歸ラ  
レケリ民氏此儀ヲ濱松へ達シケンバ則作左衛門  
ヲ召ヨセラレ如何ナル存寄ニテ打碎タルゾト御  
尋アリシ處ニ國ヲ治ルニ此事ヲナシタラバ此刑  
ニ行フヘシト定レハ下ヨリ上ノ作法ヲシリテ種  
々ノ巧ヲナスモノ也且釜ヲ設テ盜ヲマツヤウチ  
ル政ニテハ天下ノ望ハイカニト申ケレハ大ニ感  
シ思召テ常ニアラクマシキ様ナレトモ太ナル思  
慮アリトテ御賞義不斜リケルトゾ

了有玉ノ也是ハ必竟大身ノ損トモ云ベシ九人ノ  
上ニ立テ下ノ諫ヲ聞サル者國ヲ失ヒ家ヲ破ラサ  
ルハ古今トモニ無此ト 仰ラル、佐渡守兼リ覺  
居テ或時子息上野介ニ語り聞セテ落涙ニ及フ上  
野介其書付ハ如何様ノ文言ニテ御坐候其人ハ誰  
ニテ候ヤト聞ケハ佐渡守聞テ其文言モ其人モ其  
方聞テ何ノ用ニモ立莫ニテナシト申ケルト也  
東照宮濱松ヨリ放鷹トシテ三河へ御出アリシニ  
今川義元ノ製シヲカレタル大感アリ田間ニ打ス  
テ、有シヲ御覽シテ幸ノ莫ナリ濱松へ持參ルベ  
シ盜賊ヲ煮ルニ用ユベシト 仰アリシ程ニ民ト



是ヲ持行ント其コシラヘヲナス處へ作左衛門  
 廻卿シテ表ラレ何處へ持行ゾト尋シ程ニ右ノ由  
 ヲ申ケレハ則人夫ヲ出シテ其釜ヲ悉ク碎ク歸ラ  
 レケリ民氏此儀ヲ濱松へ達シケンバ則作左衛門  
 ヲ召ヨセラレ如何ナル存寄ニテ打碎タルゾト御  
 尋アリシ處ニ國ヲ治ルニ此事ヲナシタラバ此刑  
 ニ行フヘシト定レハ下ヨリ上ノ作法ヲシリテ種  
 々ノ巧ヲナスモノ也且釜ヲ設テ盜ヲマツヤウチ  
 ル政ニテハ天下ノ望ハイカニト申ケレハ大ニ感  
 シ思召テ常ニアラクマシキ様ナレトヒ大ナル思  
 慮アリトテ御賞義不斜リケルトゾ

或時諸大名ヲ召サレ土井大炊頭ヲ以テ去年ハ西  
 ノ丸様へ大猷御代ヲ御譲リ遊サルヘキ間其旨相  
 心得ベキ旨 仰出サレケレハ何レモ目出度奉存  
 由御請申上退出セシニ井伊掃部頭其頃ハ未若力  
 リシカ黙シテ御請ノ体見ヘス思ワクアリゲニ見  
 ヘシ程ニ大炊頭申セシハ掃部頭御用是アリ候是  
 へトテ御白書院へ同道シ只今ノ 上意ノ赴諸大  
 名殘ラス御請ノ所御自分バカリ御請ノ躰見ヘス  
 候何ゾ存寄候ヤト申サレケレハ掃部頭成程御察  
 シノ通りニテ候天下ノ乱ノ端ト存候得ハ曾テ目  
 出度儀ト不存候故御請不申上候大炊頭夫ハ如何



様成儀ゾト問ヒケレハ其意ニテ候大坂ノ陳ノ間  
 モナク江戸御城惣石垣ノ御普請并ニ駿府城御普  
 請其外諸方ノ御手傳ニラ天下ノ大名困究大方ナ  
 ラス候所又モヤ去年御隠居遊サレ候ハ公方  
 様へノ御祝儀將軍 宣下ノ能ナト興行仕候ハ  
 ヲ彌困窮イタシ下ヲ剥キ民ヲ苦ルニテ有ベク候  
 得ハ萬人ノ歎キ乱ノ本ト存候へハ聊日出度御意  
 トハ存奉ラス歎カハシク存候トアリケレハ大炊  
 頭ウナツキラ然ラハ御聴ニ達スヘシト申サレケ  
 レハ掃部頭夫ハ近比悦入候真直ニ仰上ラレ下サ  
 ルヤト申サレケレハ是へ参ラレ候へトテ御次

迄同道ニテ御目通へ出ラレ掃部頭シカクノ存寄  
 申上候由申上ケレハ是へ呼候へト 上意ニテ大  
 炊頭召レ御前へ罷出候其時 上意ニ只今大炊頭  
 ヲ以テ申上候段聞召レ尤ト思召候此儀ハモハヤ  
 諸大名へ仰出サレ候テ御請相濟候儀故其通りニ  
 ナレ置レ候此度申上候處御取上遊サレ候トラ  
 七重テモ遠慮ナク存寄候儀何事ニヨラス真直ニ  
 申上へキト仰出サレ候へハ大炊頭掃部頭へ向テ  
 有カクキト申上ラレ候へト有ケレハ掃部頭答テ  
 有力タキトハ申上間敷候其故ハ拙者申上候通尤  
 ト思召サレ候ニ付此度御取上遊サレ候へハ重テ



モ存寄候ハ、遠慮ナク申上ヘクト仰出サレ候ハ  
有カタキト申上ヘク候御尤ト思召サレ候へ共  
モハヤ仰出サレ候事故御取上遊サレスト仰出サ  
レ候テハ乍恐上意トモ奉存ラヌ候御尤ニ是ナ  
キ儀ヲ夕ニ仰出サレ候へハ奉畏候由御請申上候  
マシテ御尤ニ思召サレ候ヲ仰出サレニ誰力異儀  
ニ及ヒ申ヘキヤ御尤ニ急召候ト重テ仰出サレ然  
ルヘキヤト申上ケレハ御前ニモ御行當リ遊サレ  
候御様子ニテ大炊頭方ノ御覽遊サレ候時大炊頭  
申上ケルハ私杯モハヤ老衰仕御用ニ立カタク候  
躰ニ罷成候所若キ者共ケ様ナル直言申上候夏天

下御長久ノシルシ目出度御事ニ奉存候掃部頭申  
上候處道理ニ當リ申間明日諸大名ヲ召出サレ掃  
部頭申上候處ヲ被仰出然ルヘント申上候へハ  
御前ニモ其コトク思召サレ候間明日諸大名へ掃  
部頭存寄ニ付相止メ候由申渡ヘキ旨上意アリ  
シ時掃部頭謹ミ愚意御取上ニ罷成候段難有仕合  
奉存候ト涙ヲ流シ申上立ケレバ其後又諸大名ヲ  
召サレ掃部頭諫申上候ニ付明年御隠居思召止ラ  
レ候段大炊頭ヲ以テ仰渡サレシ也  
酒井雅樂頭忠世ハ御後見ニテ御尊敬ノ人也或時  
御前へ出ケル處其比世ニ大ニ行シタル刑部梨子



地ノ御印籠ヲ御床ノ上ニ差置レタルヲ見テアレハ何ニテ候ト申上ラレハ御前モ如何ト被思召シ也御赤面遊サレナガラ加賀守ガトバカリ上意也シ雅樂頭御小姓衆へ向ヒアレヲ是へト申ケルニ御前御赤面ノ御様子ヲ見奉ル故立兼シテ御覽遊サレ取テ遣シ候へトノ上意ニテ御小姓衆御床へ参リ件ノ御印籠ヲ取テ雅樂頭前ニ置ケレハ取上見テ是ハ印籠ニテ候カ加賀守御懇意ニアマヘテ若キ故ケ様ノ華美ナル物ヲ差上候ト見へ申候以前 大殿様東照宮駿府御在城ノ節夕御膳ノ御給仕ニ何某御小姓ニテ着ケル袴ヲ御覽遊

サレ夫ハ何ト申物ゾト御尋ノ時茶宇ト申物ノ由申上ケレハ上意ニ己レ惡キモノカナ天下久敷乱ニ及ヒ漸此比少シ静ニナリ萬民モ安キ様ニ見エシ處名ヲモ知ロシ召サレヌ程ノ衣類ヲ着シケル天下ノ奢ヲ始メ乱ノ端ヲ起ス不届者也御前退キ候へト以ノ外御機嫌ヲ損シ夕御膳ヲモ召上ラシス候故某モ種々ニ御機嫌ヲ取り漸々夜ニ入御膳ヲス、メ申タル有之 大殿様ニハ此コト夕天下ノ治乱ヲ御大切ニ思召シ奢ヲ御防遊サレシニ只今ケ様ノ花羨ナル遊興ヲ御賞翫遊サレ事以外ノ由申上ラレ御庭ノ石ニアテ、打ヒ



シキ捨ラレケル

御傳青山伯耆守忠俊 御前ニテ其頂躍ヲ御慰ミ  
 故御ダテヲ被遊御髪ヲ上ラル、時御鏡ニツニテ  
 御粧ヲ御繕ナサレケル處へ伯耆守參リ忽御鏡ヲ  
 取テ御庭へ投捨テ天下ヲ知シ召ス御心ニケ様ナ  
 ルハテカ候へ拙キ御事勿躰ナシ是乱ノ端也ト申  
 サレケレハ其無礼ヲ御トガメ遊サレ御前遠慮被  
 仰付候テ其後諸臣ノ諫メカサナリ 御明君ノ御  
 譽レアリシニ伯耆守諫言尤至極ニ思召シ遠慮御  
 赦免仰出サレ召サセラルレトモ伯耆守御答ニ御  
 前ノ御思召サへ御直リ被遊テ拙者申上候所能キ

トサへ思召セバ罷出ルニ不及我等罷出レハ却テ  
 御誤リ改リテ御爲ニヨカラストテ終ニ出スレテ  
 終リシ也

板倉周防守重宗所司代ノ時關東へ下向シ逗留ノ  
 中飛鳥井大納言ヲ御用ノ事アリ御老中へ仰付ラ  
 レ召サセラレ候時俄ニ周防守御役御免ノ願ヒ酒  
 井讚岐守迄申上ケレハ讚岐守申ハ只今何事ニテ  
 モ御訴訟候也驚入候只差置レ然ルヘント申ケレ  
 ハ周防守申ハ兎角存寄候間仰上ラレ下サレヘキ  
 由也松平伊豆守是ヲ聞如何ナル存寄ニヤ以ノ外  
 ノ事也是非相止ラレ候へト申ケレハ周防守馬テ



讚岐守ニハ久々御役ヲモ勤ラル、故合點モアル  
 へク候御自分杯ノ合點參ル、ニテナク候若シ御  
 取次下サル間敷ハ直訴仕ルへシト申ケレハ讚岐  
 守是非ナク御前へ罷出申ケルハ御機嫌ノ恐入候  
 へ共板倉周防守御役御免遊サル、ヤウニト達テ  
 御訴訟仕ル旨申上ケレハ御前モ御笑ヒ遊サレ是  
 へ呼ヒ候得トノ、上意ナレハ讚岐守周防守ヲ  
 道レ御前へ出罷ル時御誤リ遊サレ候堪忍仕候テ  
 相勤へキトノ、上意ナリ其時讚岐守周防守ニ向  
 ヒ難有、上意ナリト申ケレハ周防守アリカタレ  
 トハ申上ズシテ御尤成御儀ニ奉存候此、上意ノ

ウへハ奉畏候ト御請申退出セシ時讚岐守モ御前  
 ヲ立御次ノ間ニテ周防守ニ向ヒ申ケルハ、御意  
 ノ趣御役ノ御訴訟御請ノ致方共ニ心ニ得カタシ  
 如何ノ思召ニテ斯ハ申上ラレメルゾト問ケレハ  
 周防守申ハ某儀ハ恐ナカラ御身ヲ分ラレ  
 禁裏守護ニ西國迄ノ御名代ニ京都ニ差置レ候  
 二テ幸此度江戸ニ居合申間此度飛鳥井ハ某ヲ以  
 テ召ケルベキ莫ナルヲ御直ニ召シ候へハ御自身  
 所司代職御勤遊サルト申物ニ候へハ我等御役儀  
 無用ノ莫ト存シ御訴訟申候然ルヲ聞召分ラレ御  
 フヤマリ遊サル、トノ、上意故御尤ノ御儀ナル



ヨシ申上候ト申ス

大猷公御代嶋原峰起ノ時御出馬可被遊ト御意  
 有之二付老中如何ト何レモ申上御意二不叶御  
 腹立被遊御坐ヲ御立奥へ入御被遊ントス稻葉丹  
 後守御跡進ミ出ラ勿鉢魚之段申上既ニ御手討ニ  
 可被遊様ニ相見候得共丹後守御無用ニ可被  
 遊段申上ク真へ御入被遊暫ク御休被遊又表へ出  
 御御老中へ為召丹後守申分御感被遊候  
 嶋原百姓徒黨ヲ結ケル節上聞ニ達シ早速板倉内  
 膳正上使被 仰付石谷十藏御目付トシテ差遣付  
 ルノ旨被 仰出其後大久保彦左衛門永井善左

衛門ヲ召シ老中ヲ以テ御尋今度ノ儀如何ト彦左  
 工門へ申セハ御尋遅ク候由御請仕ル其段酒井讚  
 岐守忠勝申上ケレハ遅キトハ如何トアリケレハ  
 上使モ御目付モ被 仰付サル以前ニ候ハ、御尋  
 御元也今ニ於テハ遅ク御坐候忠勝然レハ被 仰  
 付悪キカト申ケレハ勿論也ト答フ遅クトモ其方  
 存寄先申上ベシトアリケレハ其節申ハ是ハ百姓  
 ハラト思召テモ六ヶ敷御敵也御手間取ルヘク候  
 其故ハ心ヲ一ツニシテケ様ニ大勢ヨヤ地ニ取込  
 ケル上ハ中々内膳十藏姫キノ小身ハ人ノ者ヲ召  
 使候テハ下知ニ付カタク我主サへ悪キ主ニハ付



カタシ況ヤ人ノモノヲヤ某存候ハ御三家ノ内御  
一人御目代トシテ遣サレ御目付ニハ堀田加賀守  
老中ニハ松平伊豆守如キノ者ヲ差添ラルヘキモ  
ノヲト申上ケレハ讃岐守則言上スト也

同御代國姓爺 日本ニ援兵ヲ乞ケレハ諸長臣ヲ  
御前ニ被召出是被捨置ハ 日本ノ耻也援兵可被  
遣旨被 仰シニ小事ナラサル故各免角ヲ申出兼  
ラレシ所ニ稻葉丹後守正勝援兵ノ莫不可然旨再  
三被申ケレハ御色ヲ変シ内ニ入ラセ玉ヒケリ明  
日又被召出昨日申セシ所思召ニ叶ハザリシカヨ  
ク御思慮有之二申所理ナリ援兵ニ及ブマシキ

由 上意ナリ

有徳公御代日本橋ニ高札建ラレ御政事ノ筋ニ於  
テ少シモ御爲ニ相成候儀心付有之者遠慮ナク言  
上仕ヘキ旨 仰申サレシ所ニ青山久保町ノ浪人  
山下幸内トイフモノ一書ヲ獻シ奉ル故御褒美ト  
シテ銀子下サレケル幸内ハ上杉流ノ軍者也云々  
同公賢明ニヲワシマストイヘ臣自己ヲヨシトシ  
給ハスシテ執權ノ諫ヲ聞召其異見ノヨキヲ撰テ  
用ヒ給ヒ猶諫ヲ聞シ召サントニヤ評定所ニ訴ノ  
箱ヲ出シ玉ヒ貴賤トナク上訴シ奉ラント欲スル  
者ハ上書ヲ此箱へ納メ御前ニテ開キ訴ヘ善ナレ



ハ賤者ノ上訴ヲモ御用ヒ被遊シトゾ  
同上意ニ財寶ヲ貴テハ其恩ヲ感スレトモ異見ノ  
恩ヲ思フ人少シ一言ニテ一生ノ身ノ夕ノニ成事  
アルモノナンハ異見程ノ寶ハナキモノト思フベ  
シトノ仰也

齊□謹テ案ニ 東照宮御初明君賢將ニマシマ  
ス御方々何ゾヤ下ヨリ申程ノ事知ロシ召ヌ  
ノアルヘキサレトモ多キ内ニハ日月ノ蝕ノ  
如ク誤チ玉フトモ有リ又ハ下々ノ事ニ至リテ  
ハ御承知ナキトモ可有之ト廣ク言路ヲ開キ玉  
フト則明君タルユエンニテ人主タル者ハ人ニ

取テ善ヲナストヲ樂シム處肝要ナリ小人ハ我  
心付タル莫ニテモ人ヨリ発語スル時ハ否ト答  
ル者也主君タラシ人ハ誰イフ莫ニテモ本文ノ  
明訓ヲシタヒテ理ノ當然ナルトハ用ユベキコ  
トナリ

刑ハ刑ナキ二期スヘキ事

東照宮濱松駿府ニ御坐ノ節モ博奕ハ諸惡ノ根元  
ト有之 御意ニテ御城下ノ儀ハ申ニ不及四ヶ國  
ノ砌御當地ノ儀ハ申ニ不及總テ関八州共ニ北條  
家ノ柔弱ナル仕置故僧俗男女ノ差別ナク押暗テ  
博奕ヲ打モコレアル段御聞ニ達シ板倉四郎左衛



門後任伊賀守其外御物頭衆兩人被 仰付嚴敷御法度  
 二被 仰出其節二ハ盜賊ナト多ク候處二其盜賊  
 共ヲハ牽舎杯被 仰付候へ共博奕ヲ仕候者共ヲ  
 ハ暫モ御宥免ナク捕へ次第片端ヨリ御成敗被  
 仰付レ也其節淺草邊ニテ博奕打候者ヲ捕へ五人  
 共ニ其處ニ獄門ニカケラル、ヲ御鷹野御成ノ節  
 是ヲ御覽遊サレテ還御以後博奕吟味ニ掛候者共  
 ヲ御城へ召テ御直ニ被 仰渡ケルハ總テ科人ヲ  
 仕置ニシテ其首ヲ獄門ニ掛サラシ置モ諸人見コ  
 リノ為ニテ有ナレハ五人一坐ノ博奕ナラハ何月  
 何日何方ニテモ人立多キ場所へ出シサラシ置様

二ト 仰付ラル、ヲ以テ其以後ノ儀八十人一坐  
 ニテ捕へ候へハ十ヶ所へ遣シ御仕置ニ被 仰付  
 首ヲ其所ニカケ置ニ付二三年ノ間ニ博奕沙汰止  
 ケルナリ云々

齊□謹案二事ハ微發アル處ヲ禁スルヲ先務也  
 夕トへハ風ハ萬病ノ長トイフ力如ク少シノ風  
 邪ニ強キ藥ヲ用ヒ熱氣ヲ取ル時ハ夏モナク瘡  
 へキヲ微恙ナリトテ其俣指置時ハ大熱トナル  
 ノミナラス人へマテ推移ルモノ也博奕モ其長  
 シタル者ハ勿論幻年杯ニテ初タル者モ死刑迫  
 ニハナクトモ嚴重ニシテコラシメタル力ヨキ



ナリ盜賊共ヲハ牢舎抔被 仰付博奕ヲ仕者共  
ハ暫クモ御宥免十ク召捕次第片ハシヨリ成敗  
シ玉フ段却テ御仁惠ノ至リト申ヘシ博奕シテ  
經營ヲソコ子窮迫スル時ハ夫ヨリ色々ノ惡更  
ハ出来ル者也己ノミナラス人マテサソヒ出シ  
月々年々ニ惡者ノ數多ク出来者也サレハ一人  
ヲ殺シテ衆人ヲ善道へ導キ玉フ有カタキ御更  
也不見識ノ者ハ博奕ハ盜賊抔ヨリヤ、カロキ  
ト思ヒ嚴重ノ刑二行ハサレハ當世ハ次第く二  
博奕多ク御城へ登城セシ供ノ小者マテ城内ニ  
テサへ博奕ヲスルコトナリテケ様多ク成タル

上ハ嚴刑ニ列置スルコトモナシカタキヤウ成リ  
行タルハ其刑ユルキ故也サリトテ今ノ世見付  
次第片ハシヨリ 神君ニテ被 仰付シ如ク嚴  
刑二行ヒナハ多人數ノ怪我人出来テ是亦御仁  
惠ヲ損スヘシサリトテイツ迄モ此マ、ニテ捨  
置時ハ追々惡者ノ之増長スヘケレハ一度嚴重  
ノ命ヲ出シ置テ先ツ一ケ年力間ハ召捕次第遠  
嶋杯申付二ケ年目ヨリハ 神君仰ノ如ク片ハ  
シヨリ死刑二行ハル、ガヨロシキナリ終テ何  
刑ニテモ人ヲ殺スコトヲ樂ムニアラズ後人ノ  
見セシメナレハ外ヨリ見テハイカニモ嚴二見



ヘテ其當人ハサマテクルシマヌ様ニスベキ也  
刑ノ夏ハ品カズ多キ事ナレドモ先ツ博奕ハ諸  
惡ノ根元トノ玉ヘル 上意ニヨリテ博奕ノ刑  
ノミ論スルナリ

明訓一班抄卷之一終



